

世界防災フォーラムテクニカルセッション 「市民協働と防災」開催結果概要

1. 日時

平成 29 年 11 月 26 日（日曜）14 時 30 分～16 時 00 分

2. 会場

仙台国際センター会議棟 3 階「白樫 2」

3. 主催

仙台市（市民局市民協働推進課）

4. 入場者数

100 名（うち外国人 10 名）

5. 開催結果概要

「多様な主体による協働を防災につなげ 一平時からの取り組みのすすめ」と題し、岩手、宮城、福島の実践事例の紹介とパネルディスカッションを通じて、大規模災害時に機能する協働のあり方について考えるテクニカルセッションを開催しました。

前半のパネリストからの事例紹介では、いわて連携復興センターの鹿野氏が、東日本大震災以前から築かれていた岩手県広域での連携が復興の基盤となった点に触れ、「誰かひとりだけが頑張っても復興は進まない。災害が起きてから慌てないように、協働というものを今一度考えるべき」と提言しました。続いて、ふくしま連携復興センターの遠山氏は、地域コミュニティの再構築を進める福島県内の活動事例を紹介し、「何かしら動きがあると人が集う拠りどころとなって拡大し、災害時には支援も集まりやすい。何でもいいのでとにかくやるのが仕組みづくりとして重要」と話しました。人と防災未来センターの菅野氏は、被災地で活動を行った非営利団体対象のアンケート調査で、仙台市は他の地域に比べ、地元の団体が協働して復興支援活動の中心を担い、全国からの支援金を活用して事業を実施してきたことを明らかにし、その理由として、震災前から長く培われてきた協働の文化があったことを指摘しました。

続くパネルディスカッションでは、震災の経験や教訓を踏まえ、どのような「仕組み」と「実践」があれば協働を防災につなげられるかについて、パネリストと参加者が一緒に考えました。「とにかく動くという『実践』がないと『仕組み』は生かされない」、「無理せず続けられる『仕組み』と『実践』が防災につながる」といった意見が出されました。最後に、ファシリテーターである地域社会デザイン・ラボの遠藤氏が、「協働の仕組みを名前だけの形骸化したものとはせず、市民、行政などが相互に対話し、深化させていく必要がある」と総括しました。会場からも「自身の活動の意義を実感することができた」といった感想が寄せられました。

○会場では、相嶋氏によるファシリテーショングラフィックが行われました



6. セッションの様子



会場の様子



ファシリテーターの遠藤氏



(右から) パネリストの鹿野氏、遠山氏、菅野氏、ファシリテーショングラフィックを行う相嶋氏



来場者との意見交換